

2011年6月6日 ITCN 夜の集会メッセージ

「怒りとの付き合い方」

聖書箇所：創世記4：1－8

- 1：人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、主によってひとりの男子を得た」と言った。
- 2：彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。
- 3：ある時期になって、カインは、地の作物から主へのささげ物を持って来たが、
- 4：アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。主はアベルとそのささげ物とに目を留められた。
- 5：だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。
- 6：そこで、主は、カインに仰せられた。「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。
- 7：あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」
- 8：しかし、カインは弟アベルに話かけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。

3つのポイント：

- (1) 神に思いのたけをぶつける
- (2) 怒りの根っこに自分の罪を認める
- (3) 神の無限の愛を知る

メッセージ骨子：

<序論> 怒りをためることは、心にも体にもよくないことです。でも人は皆、怒りをため込んで生きているとも言えます。さてカインはなぜ怒ったのかでしょうか。まずアベルのささげ物には心があり、カインのにはそれがなかった。人はごまかせても神はごまかせないのですが、カインはその「心の違い」から神に受け入れられなかったのですが、そのことにうすうす感づきながらも、あえてそれを認めなかった。自分の理不尽な怒りを悔い改めることなく、その怒りに身を任せてしまいました。

<ポイント1> 「神に思いのたけをぶつける」

私たちが生きていく中に、怒りの発生源は無数に存在します。かつそれは複合的なのでいったい何で怒っているのか自分でも分からなくなることさえあります。詩篇の詩はその 2/3

が怒り、嘆き、悲しみの詩です。つまり詩篇の作者は神に思いのたけをぶつけているのですが、実はそれが怒りの真の解決の第一歩なのです。神にぶつけ、やり取りする中で、実はその本当の原因が神にではなく自分の罪にあるのだと気づかせてくださるのです。

<ポイント2> 「怒りの根っこに自分の罪を認める」

怒りは伝搬します。自分の怒りが人に移り、その人も怒る。それを見て、相手を「怒りっぽい」と決めつけ、裁くケースは多々ありますが、それはよい結果を生みません。まず自分は何に怒っているのか、自分の中に今だに解決できていない問題はないかと、心の傷を掘り下げたとき、今現在の怒りの糸口を過去の自分に見つけることがあります。罪を認め、悔い改めた時、怒りの負のスパイラルが断ち切られるのです。

<ポイント3> 「神の無限の愛を知る」

人を赦そうと思っても、簡単にはいきません。人にはプライドや相性の問題もあるからです。でもこの自分の罪や弱さを受け入れ、赦し、無罪放免にくださった神の恵みを知るとき、怒りやいらだちは自然とレベルゼロになります。神の無限の愛を知り、そこに憩うことこそが、怒りの最終的な解決の道なのです。

<まとめ> ウサマ・ビン・ラディン容疑者をアメリカ当局は10年越しで探し出し、殺害しました。テロはもちろん許させるものではありませんが、暴力の応酬、負の連鎖を主が喜んでおられるとは思えません。我々には「正義のげんこつで相手を正す」思いを抑えきれない時がどうしてもあります。その連鎖を断ち切る愛の剣が、イエス様の「父よ、彼らをおゆるしてください」という十字架上の祈りでした。我々も、まず主の私たちに与えてくださったその赦しをよるこび、その愛を今度は隣人に流しだし、ピースメーカー、神の子と呼ばれるものになりたいものです。